



イヤイヤ期を克服する 「子どもの脳に入る会話」

小さい子のイヤイヤ期についても、原理は夜泣きと同じです。「仲間になりたい」という、脳細胞由来の本能の育て方が甘く（お母さんと子どものコミュニケーションが不足）、また「ああしなさい、こうしなさい」と言われすぎると、自分を守ろうとする自己保存の本能が過剰になり、これに自我達成の本能（自分でやりたい！という気持ち）が重なって、イヤイヤ期という反応を起こします。

お母さんにとっては、「言うことをきかない子」として映るでしょうが、子どものイヤイヤ期という現象は、本能的に誰しもがもっている

ることです。このときお母さんが、「違いを認めて共に生きる」という、「考えを生み出す基盤」である自他共生の本能を大切にしている場合は、それほど重大な問題には発展しません。

しかし、イヤイヤの内容が、統一・一貫性の本能から外れた間違つたもの（夜、遊びたがって決められた時間に寝ないなど）、仲間でありたい、生きたいという脳細胞由来の本能から外れるもの（友達にいいわるをする、急に道に飛び出すなど、命の危険に関わること）の場合は、イヤだと言つてもしつかり指導する必要があります。

ただし、統一・一貫性の本能がまだ未熟な子どもの場合、いくら口で説得しても、一度で完璧に理解することはできません。イヤイヤ期の子どもには、「片づけなさい！ 何度言ったらわかるの」などの小

言を毎日のようにくり返しても伝わらないので、先に紹介した「子どもの脳に入る会話」(140 ページ参照) が有効になります。

「子どもの脳に入る会話」とは、すでに紹介した、子どもの言葉を最初にくり返すこと。「イヤだ！ お薬を飲みたいくない！（あるいは注射はしたくない）」と子どもが駄々をこねたときは、「そうだよね。誰でもイヤだよね。お母さんも最初は、○○ちゃんと同じように、イヤだ！ と言ったの。でもね、そうしたら、なかなかお熱が下がらなくて……」と、具体的な話をしてあげましょう。そのうえで、「だから注射をがんばったら、みんなからすごい！ と言われて、ほめてもらえて、お熱もちやんと下がったよ。あなたはお母さんの自慢の子どもだから、きつとがんばれるはずだよ」と、克服できたらどうなるかを、お母さんの体験談と重ねて伝えます。

あるいはお友達とケンカをしてしまった、謝りたくないという場合は、「○○ちゃんだったら、お母さんよりもっといい方法を考えつくかもしれないね。いい方法があったら、明日お母さんに教えて」など、子どもを信頼し、一方的に叱るのではなく、子どもの脳に入る会話をつないでいきましょう。

「子どもの脳に入る会話」とは、親目線のお説教や小言ではなく、このように子どもの立場に立った対話のことです。さらに、子どもの脳が対応できる、ゆったりとした間合いで話することも、とても大切です。一方的に早口で責め立てると、子どもの脳は対応できないというところをお母さんは知っておいてください。